

## 第13回 東京出雲学生会

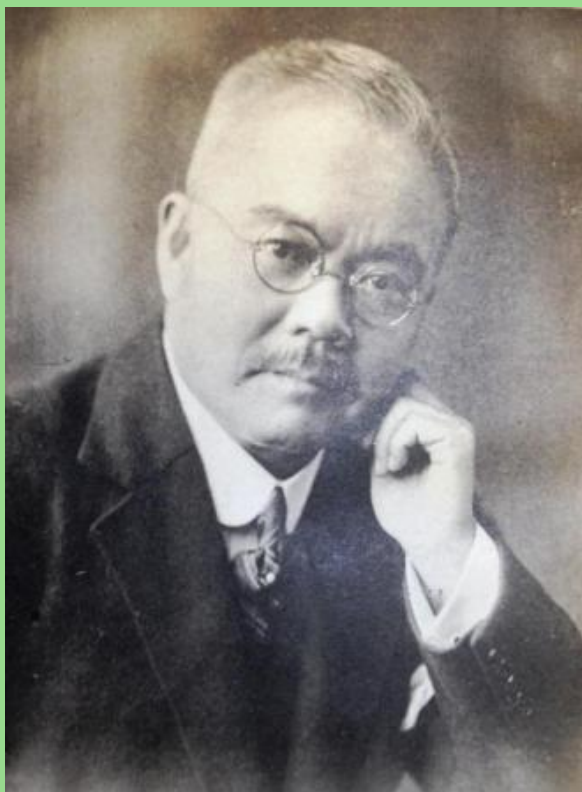
「ふるさとの訛(なまり)なつかし 停車場の人ごみの中に そを聴きにゆく」(『一握の砂』1910年)

「ふるさと」を歌った数多くの石川啄木の短歌の中でも、この歌はよく知られています。岩手県生まれで当時東京に住んでいた啄木は、故郷を懐(なつ)かしむ心情を、上野駅の雑踏の様子とともに目に浮かぶように歌っています。

これより先、旧浜田藩出身者が東京で結成した「浜田会」の機関誌『浜田会誌』創刊号[1892年]は、「発刊の辞」を次のような意味の言葉で書き始めています。「近頃、全国の人々で郷党会を作らない人はいない。ある県の人々はその県の人同士で集まり、ある国の出身者はその国の出身者同士で親睦を深めている。規模の大小の違いはあるが、同郷の人が結集しないということはない。」

東京出雲学生会の中心人物であった岸清一

『岸清一伝』(岸同門会編、1939年)より



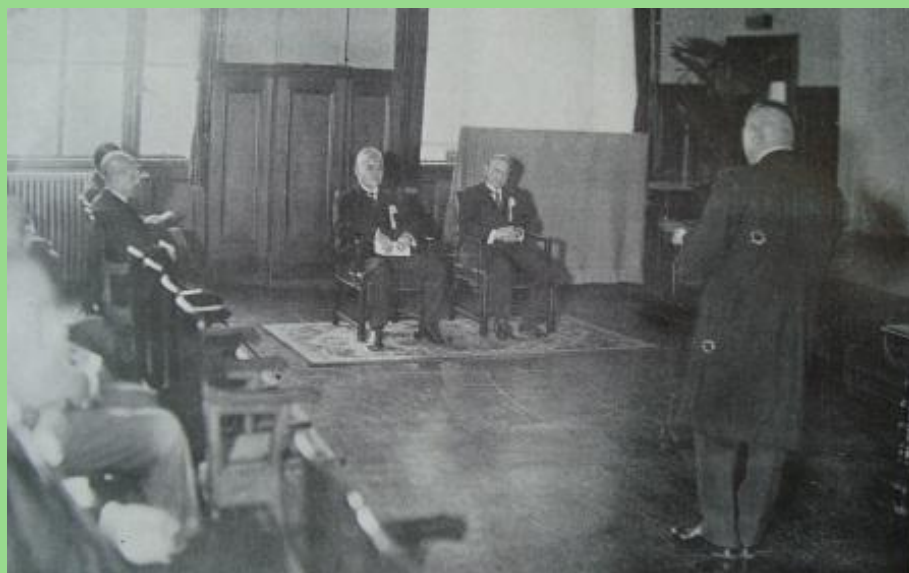
このように、出身地を同じくする人が、親睦を目的として移住地で結成する団体を同郷会と呼びます。1871年の廃藩置県の後、旧藩主は東京に住むことを命ぜられますが、その際、旧家臣の中には藩主とともに東京に移住する人もいました。また、当時、高等教育機関が東京に集中していたことから、大学等で学ぼうとする人は、故郷を出て東京に向かいました。このような事情から、東京では、旧藩出身者が旧藩大家の当主を中心として親睦を深めたり、高等教育を受けるため上京した学生の学業を奨励したりすることを目的として、数多くの同郷会が結成されま

した。ここで紹介する東京出雲学生会(雲国学生会)も、そのような同郷会の一つで、1883年(明治16)10月17日の神嘗祭(かなめさい)当日、東京・外神田の福田楼を会場として会員8人で結成されました。この会の創立期の中心人物の一人で、同会の発展を終生応援していたのが、雑賀町出身の岸清一でした。今回は、東京出雲学生会の『創立第五拾年記念号』(1934年)によって、同会の創立期の特徴を紹介しましょう。

さて、上京した学生を待ち受けていたのは、下宿屋などの「遊惰放逸」などと言われる気風でした。旧加賀藩出身者を会員とする「久徴社」は、上京した学生がこのような都会の悪風に染まらず学業成就できるようにとの目的で、1882年に設立されたものです。上京学生を待ち受けていた首都東京の環境の中で、もう一つ注目されるのは、自由民権運動でした。創立期の会員であった志立鉄次郎(日本銀行等を経て日本興業銀行総裁など歴任)は、1881年9月に松江を出発して東京大学に入学しました。それは北海道の開拓使官物払下げ事件から大隈重信の参議罷免に至る「明治十四年政変」の只中で、志立自身も「政治に志し、東京に出て、政治学を修めようと決心した」と述べています。同じく創立期の会員であった仙田謹一郎は、「東京に出て一番楽しみと思うのは、政談演説を聴くことと団十郎の芝居を立ち見することだ」と言っていたといえます。志立の回想に戻りますと、出雲出身の学生がこのような政治に関心をもったのは、旧松江藩士の高橋基一が自由民権派の有力新聞の一つであった『朝野新聞』の主筆として論陣を張っており、彼の主宰する集會に梅謙次郎を含む出雲出身者が出席していたことにもよるといふことです。

#### 岸・志立両創立委員へ土谷幹事の謝辞

島根県立図書館蔵『東京出雲学生会創立五拾年記念号』より



創立当初の会則「雲国学生会規則」は、その第一条で、「本会は出雲学生中、有志の者相结合し、交情を親密にし知識を交換し、相助け相補い以て卑屈の陋習(悪い習慣)を蟬脱する(抜け出す)を以て目的とす」とその目的をうたっています。それは、以上のような当時の状況に対応してのものでした。東京に出てきた出雲出身の学生が、相互に親睦を深め知識をみがき合いながら、助け合って成長していこうというのです。東京出雲学生会では、この目

的を達成するために、「毎月第三日曜日」に「日常会」と称する例会を開くとしています(第二条)。1932年10月の会合は第362回とされていますから、1年平均で7回以上開催されていたこととなります。また、規則第三条で「本会には幹事二名を置き入会の順を追ひ、順次二ヶ月宛その任に就くべきものとす」とされているように、会の運営は現役学生自身が順次担っていくとされており、岸清一はこの点を重視したということです(『岸清一伝』)。さらに、入会には会員二名の紹介と「会の輿論(大方の賛同)」が必要とされるなど(第五条)、入会審査が厳密であることも特徴でした。

創立の翌年1884年(明治17)末の会員は19人でしたが、その中には、岸清一・志立鉄次郎のほか、『史記会註考証』の著者瀧川亀太郎らの名前がありました。『創立第五拾年記念号』に収録されている「出雲学生会五十年小史」には、第6回以後の例会記録が載せられています。そこには、西田千太郎の「試験優等及帰国奉職」の歓送会が開かれたこと(第55回、1888年8月11日)、「大日本帝国憲法」発布の翌日に例会を開いていた神田・青柳亭の前を、上野公園で開催される憲法発布祝典に行幸する明治天皇の鳳輦が通過し、「会員一同階を降りて竜顔(天皇の顔)を拝した」こと(第60回、1889年2月12日)など、出雲出身者の東京での動静や当時の政治・社会の状況が書き留められています。また、第106回例会(1894年1月21日)で実施された「学生会員十傑投票」では、岸清一が「豪胆家」、若槻礼次郎が「着実家」、三浦周行が「勉強家」と評されるなど、人物情報を得ることもできます。

#### 創立50周年記念祝賀会出席全員写真

島根県立図書館蔵「東京出雲学生会創立五拾年記念号」より



今回の松江市史では、松江市域の出来事だけでなく、松江市域出身で県外で活動している人々や団体も対象として叙述します。それによって、松江市の歴史を広く全国的視野で検討したいと考えています。

(平成23年10月3日 近現代部会 竹永三男)